

県内復興・経済日誌（2018年7月）

1日

《阿武隈急行、全線開業30周年祝う》

「阿武隈急行」の愛称で親しまれている第三セクター鉄道の阿武隈急行（本社・伊達市）が、全線開業30周年を迎えた。記念式典が同市梁川駅前で行われ、通勤通学や生活者の足、観光路線としてより良いサービスの提供を誓い合った。阿武隈急行は、旧国鉄丸森線（槻木－丸森間）を引き継いで福島市まで延長し、1988年7月1日に54.9kmの全線が開業した。

2日

《会津大学に知財活用支援の特許庁職員が出向》

特許庁から会津大学（会津若松市）に出向した岡裕之氏が、上級准教授として学内の復興支援センターに着任した。情報技術（IT）分野の特許などの有効な活用方法を指導するとともに、産学官連携を後押しし、地域経済の活性化につなげる。同庁は、浜通りや原発事故に伴い避難区域が設定された市町村の産業発展に向け、2019年4月から特許料金を4分の1に軽減することにしており、相乗効果が期待される。

4日

《白河市で完全人工光型植物工場が起工》

三菱ガス化学（本社・東京）が白河市豊地の「QOL イノベーションセンター白河」に新設する国内最大規模の完全人工光型植物工場の起工式が、現地で行われた。LED照明を使い1日当たり約2.6tのリーフレタスを生産する。工場は障害者も働きやすいバリアフリー設計で、パートを含め70～80人を新規雇用する計画。2019年夏の完工を予定している。

9日

《県内宿泊を選んだ理由、「良い宿があったから」が59%》

じゃらんリサーチセンターが、2017年度の宿泊旅行調査の結果を発表した。旅行先に福島を選んだ理由では、「良い宿・ホテルがあったから」との回答が59.0%で全国5位、「魅力的な温泉があったから」が54.1%で全国10位となった。本県を訪れた宿泊旅行者数は前年度から延べ32万人増え、増加率は沖縄、奈良両県に続き

12.2%で全国3位であった。

10日（日本時間11日）

《奥の松酒造の吟醸酒が世界一に》

世界最大級のワイン品評会「インターナショナル・ワイン・チャレンジ（IWC）2018」の最終審査結果がロンドンで発表され、日本酒部門の最優秀賞「チャンピオン・サケ」に奥の松酒造（二本松市）の吟醸酒「奥の松あだたら吟醸」が輝いた。県内蔵元の世界一は2015年のほまれ酒造（喜多方市）に次いで2度目となる。同社の遊佐丈治社長は「福島がまだ風評被害に遭っている中で素晴らしい賞をいただき光栄に思う」と喜びを語った。

11日

《「TOKIO」、新CM発表会で県産農産物をアピール》

人気グループ「TOKIO」が出演する県産農産物をPRする新CMの発表会が、東京都内で開かれた。同発表会では「うまい！福島の野菜編」など3本のCMが上映され、リーダーの城島茂さんは「安全、安心、おいしいと三拍子そろった福島の農産物をぜひ味わってほしい」とアピールした。元メンバーの強制わいせつ事件発覚後、内堀知事は「TOKIOは全力で応援してくれた」として、早々に起用継続を表明していた。

12日

《台湾チャーター便、過去最高の96便へ増便》

県は、台湾の航空会社「遠東航空」（本社・台北市）と11月から2019年3月までに福島空港と台湾を結ぶ観光チャーター便を28往復56便運航することで合意した。2018年度は既に40便の運航が決まっており、今回の増便によって、本年度のチャーター便運航数は前年度の約3倍の96便に上る見通しで、年間運航実績では過去最多となる。県は、チャーター便の実績を積み重ね、定期便の実現を目指す。

《東京オリンピックの聖火リレー、本県スタートが決定》

2020年東京オリンピックの聖火リレーが、同年3月26日に本県を出発し、各都道府県を巡ることが決定した。震災と原発事故で甚大な被害を受けた本県から出発することで、開催理念で

ある震災からの「復興五輪」を強く印象づける。本県、宮城県及び岩手県の東日本大震災の被災3県はいずれも3日間の日程となる。

13日

《県、オンラインストアで県産品の販売促進キャンペーンを展開》

県は、インターネット通信販売のアマゾン、楽天市場、ヤフーショッピングのオンラインストアで、県産農林水産品や加工品の販売促進キャンペーンを開始した。今年度は、4回の開催を予定し、モモや夏野菜、コメ、肉やあんぽ柿などを中心に売り込む。前年度の販売額15億4,800万円を上回ることを目標に設定し、県産品の販路拡大を図る。

14日

《飯坂温泉に地元果物を使用したグラノーラ直売店オープン》

福島市飯坂町の果物を使った6次化商品「飯坂温泉グラノーラ」を製造・販売する「湯のまちいざかグラノーラ工房」が、同市飯坂温泉内にオープンした。グラノーラは、自家製シロップで焼き上げたオーツ麦などのシリアルに、低温乾燥したドライフルーツを加えて仕上げる。グラノーラの販売を通して、福島のおいしい果物を県内外に広くPRし、原発事故の風評払拭につなげる。

17日

《大阪に県産酒販売のサテライトショップ開設》

県と県観光物産交流協会は、県大阪事務所（大阪市北区）内に、県産日本酒の販売拠点「観光物産館大阪サテライトショップ」を開設した。西日本初の常設店舗で、県産日本酒約70銘柄のほか、おくや（喜多方市）の豆菓子や川俣シャモジャーキーなどを販売する。全国新酒鑑評会で金賞受賞数6年連続日本一に輝いた県産酒の品質の高さやおいしさを広く発信することで、知名度向上と販路拡大が期待される。

20日

《「福島ロボットテストフィールド」、通信塔2基運用開始》

県などが整備中の「福島ロボットテストフィールド」（南相馬市、浪江町）で、小型無人機「ドローン」の飛行を支える通信塔の運用が開始された。テストフィールドは、原発事故で被災した浜通り地区に新産業を集積させる

「イノベーション・コースト構想」の中核施設。50haの敷地内にある通信塔は高さ約30mで、操縦者の指示送信を可能にする通信アンテナや、鳥などとの衝突を避ける空域監視レーダーなどを備える。

21日

《葛尾村のコチョウラン、首都圏へ初出荷》

葛尾村が農業振興の目玉と位置付けるコチョウランの初出荷式が、村内の「かつらお胡蝶蘭合同会社」で行われ、首都圏向けの出荷が始まった。白色のコチョウラン「ホープホワイト」が積み込まれたトラックが発し、くす玉が割られた。同社は今年1月に栽培を開始、福島、郡山、仙台の各市向けには6月下旬から既に出荷が始まっている。年間48,000株を生産し、売上高1億4千万円を目指す。

《原釜尾浜海水浴場、8年ぶりに海開き》

震災による津波で大きな被害を受けた相馬市の原釜尾浜海水浴場が、8年ぶりに再開した。震災以降、県内の海水浴場はいわき市の3カ所が再開しているが、相双地方では初めてとなる。海の家が並んだ海水浴場の砂浜には、色とりどりのビーチパラソルの花が咲き、盛夏らしい光景が戻った。同海水浴場は遠浅の海岸として知られ、震災前は年間3～5万人が訪れていた。

28日

《「復興のシンボル」Jヴィレッジが再始動》

Jヴィレッジ（楡葉町・広野町）が、震災と原発事故に伴う休業から約7年4カ月ぶりに営業を再開した。日本サッカー協会名誉総裁の高円宮妃久子さまを記念式典にお迎えし、県や双葉郡、サッカー界などの関係者が「復興のシンボル」となる施設の復活を祝った。運営会社Jヴィレッジの社長を務める内堀雅雄知事は、Jヴィレッジをスポーツ振興や双葉郡、浜通り、全県の活性化に活かす決意を示した。

《相馬野馬追、浪江町で8年ぶりに武者行列復活》

一千有余年の歴史を誇る国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」が開幕し、原発事故後に中止していた標葉郷騎馬会による浪江町内での出陣式や騎馬武者行列が復活した。避難先などから駆け付けた町民らの見守る中、8年ぶりに威風堂々とした行列が繰り広げられた。29日の本祭りでは、南相馬市原町区の雲雀ヶ原祭場^{かつちゅう}で甲冑競馬や神旗争奪戦などが行われた。